

Artist in Residence 2017 & Performance Papermoon Puppet Theatre

Artist in Residence 2017 & Performance
Papermoon Puppet Theatre from Indonesia
"TRANSLUCENCE"

アーティスト・イン・レジデンス 2017 & 公演
ペーパームーン・パペット・シアター
「和紙を透かして」 / インドネシア

The Museum of Art, Kochi

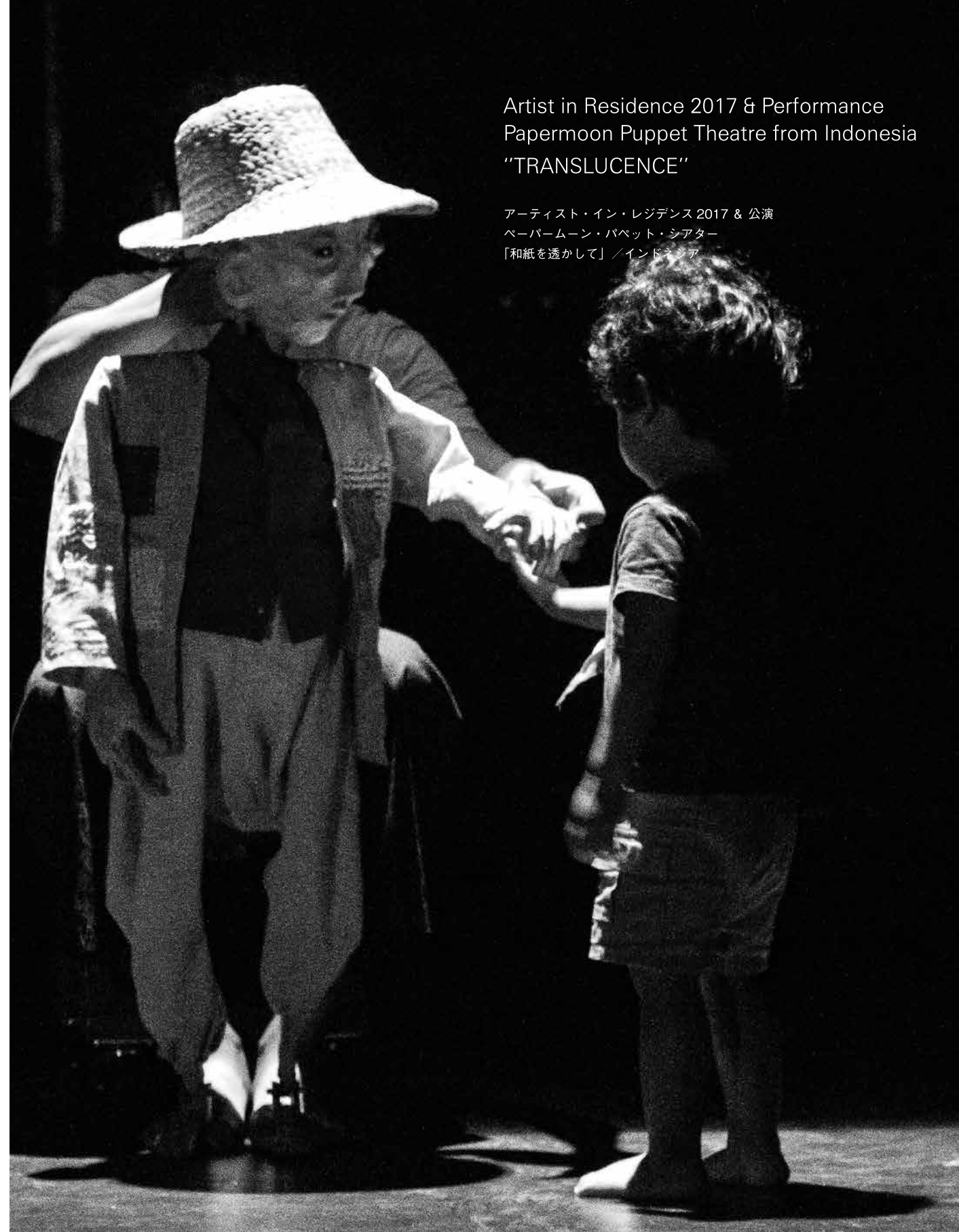
Kochi Performing Arts Festival 2017
高知パフォーミング・アーツ・フェスティバル 2017

The Museum of Art, Kochi

2017

Artist in Residence 2017 & Performance
Papermoon Puppet Theatre from Indonesia
"TRANSLUCENCE"

アーティスト・イン・レジデンス 2017 & 公演
ペーパームーン・パペット・シアター
「和紙を透かして」 / インドネシア



Papermoon Puppet Theatre

ペーパームーン・パペット・シアター

マリア・トリ・スリスチャニ
●共同芸術監督・演出



イラストレーター、作家、元舞台役者のマリア・トリ・スリスチャニと、美術作家のイワン・エフェンディによって設立。2006年以来、人形劇による実験を多く行っている。伝統的な人形劇で世界的に知られるインドネシアのジョグジャカルタを拠点とし、若くして専門的な技術を持つペーパームーンは、創造力を持って、アイデンティティと社会の問題を切り開いていく作品を創作している。また、2008年より、国際ビエンナーレ・パペット・フェスティバル「Pesta Boneka」を始動している。

インドネシアのみならず、米国、オランダ、日本、インド、韓国、マレーシア、シンガポール、オーストラリアなど各地で作品を発表する他、国内外各地でワークショップ、レクチャー、共同制作なども精力的に行っている。

Papermoon Puppet Theatre was founded as a brainchild of Maria Tri Sulistyani (an illustrator, writer and a former theatre performer) and Iwan Effendi (a visual artist). Since 2006, this couple has been doing lots of experiments on the arts of puppetry. Based in Yogyakarta, Indonesia, in a country with world-renowned puppetry traditions, the young, expert artists of Papermoon are extending the form with their mixed-media productions, and creating works that imaginatively explore identity and society. They initiate international biennale puppet festival calls Pesta Boneka since 2008.

Papermoon has been presented its artworks, workshops, lectures and co-collaboration works not only in Indonesia, but also in other countries, such as United States of America, Netherland, Japan, India, South Korea, Malaysia, Singapore, Australi



ガディン・ナレンドラ・パキシ
●舞台監督・照明



ルナン・プラムセサ
●パフォーマー



イワン・エフェンディ
●芸術監督



レトノ・インティアニ
●衣装



アントン・ファジリ
●人形造い



片岡美由紀
●パフォーマー



山本香菜子
●パフォーマー



浜田あゆみ
●パフォーマー



aCae (アカエ)
●作曲

Residence Artists

レジデンス・アーティスト



バンボ・プリヤルティ・ラヌハンドコ
●人形造い



ベニ・サンファヤ
●人形造い



オペラ
●バイオリン

Local Artists

地元出演者

♪ 挿入歌
前田力丸 | パーカッション
イガキアキコ | バイオリン
渡辺幸男 | 口笛

ずっと滞在したい場所

自然と和紙と魔法の口笛に包まれて



A linger to Kochi :
Between the greens, paper, and the magic whistle

高知に滞在するのはこれが2度目になります。
同じ場所に2度もレジデンスをする機会があるなんて、私たちにとっては本当に貴重なことでした。
それは私たちが心から愛する場所を再訪するだけにとどまらず、
大好きな人たちに会い、大好きなものを食し、
さらに深くこの土地を理解する機会が与えられたからです。
今回は特に、和紙とその製造に関わる農家、職人、消費者の関係について学ぶ機会を得ました。
和紙そのものについて学ぶ以上に、その一連の「旅」はさらに深い何かを私たちにもたらしたのです。
それは情熱であり、愛であり、物事を成し遂げるポジティブなエネルギーでした。
今回のリサーチ期間中に私たちがお会いした方々の中に、
ご高齢の方が多かったのは、きっと偶然ではないはずです。
楮農場の黒石正種さん、鹿敷製紙株式会社の浜田淑子さん、
いの町紙の博物館の紙漉職人友草喜美枝さん、紙人形職人の田村多美さん、
版画家の安芸真奈さん、口笛ミュージシャンの渡辺幸男さん。
彼らは私たちがそれぞれの旅へと誘ってくれました。
彼らが私たちに教えてくれたのは、夢を生きること、
大きな情熱で好きなことに取り組むこと、そして旅の途中では忍耐強くあること。
今回の高知への長い旅は、和紙を通して、
自分たちを再び見つめ直す機会を与えてくれました。

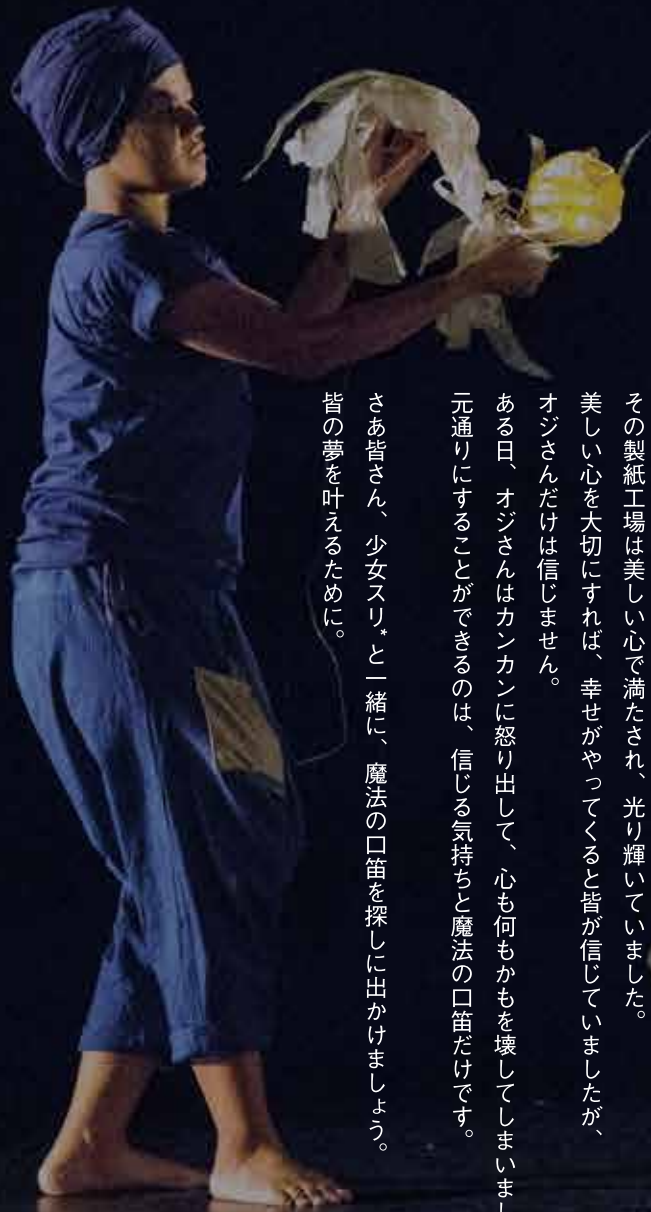
ペーパームーン・パペット・シアター 共同芸術監督・演出 マリア・トリ・スリスチャニ

This is our second time to visit Kochi.
Having second chance to do the residency in one place is really precious for us.
Not only we could revisit the place we adore, meet the people we love, and eat the foods we like,
but we have chance to understand them deeper.
We got a chance to learn more about the circle of Washi paper this time from the farmer,
the maker to the users.
But more than the paper itself, this journey brought us something deeper.
It's about the passion, the love and the positive energy to do a thing.
Maybe it's not a coincidence that most of the people we met in our research period are elderly.
Meeting those wonderful people, Masatane san (Kozo farmer),
Toshiko san (Kashiki Paper Mill), Kimi san (washi maker artisan in Ino Paper Museum),
Tami san (paper doll maker) , Mana san (printmaker) and
Watanabe san (whistler) took us to a different journey.

They taught us to live our dreams, do the thing we love with a big passion, and be patient in the journey.
Kochi this time brought us a longer journey to see things through the papers to rediscover ourselves.

Papermoon Puppet Theatre Co-Director : Maria Tri Sulistyani

和紙を透かして



小さな町には、1軒の製紙工場がありました。
その製紙工場は美しい心で満たされ、光り輝いていました。
美しい心を大切にすれば、幸せがやってくると皆が信じていましたが、
オジさんだけは信じません。
ある日、オジさんはカンカンに怒り出して、心も何もかもを壊してしまいました。
元通りにすることができるのは、信じる気持ちと魔法の口笛だけです。
さあ皆さん、少女スリ*と一緒に、魔法の口笛を探しに出かけましょう。
皆の夢を叶えるために。

タニという名前のおじいさんがいました。
おじいさんは、山の中の農場に住み、寒い冬もたった一人で仕事をしていました。
冷たい木枯らしはおじいさんの体にかなりこたえます。
ところが、おじいさんが魔法の口笛を吹くと、すぐにすべてが元どおり。
おじいさんの魔法の口笛は、心に幸せを運んでくれるのです。

遠く離れたあるところに、小さな町がありました。
その町に住む人々は、2つのことを信じて暮らしていました。
それは、愛すれば、皆が幸福で、心のままに過ごせること。
でも怒りを表せば、その暮らしのすべてを台無しにしてしまうことです。

Far in a little town,
People who live there believe in two things;
That love and happiness will live their soul, and anger will ruin their lives.

Tani san is an old farmer who lives in a mountain.
He works alone even in a cold winter time when breezy wind hits his old body.
But everything changes just right after his special magic whistle.
His magic whistle could bring happiness to the soul.

In another part of the town, there is a paper mill.
The place is lightened up with a beautiful soul.
Everyone except oji san respect the soul because they believe that it would bring a good luck.
His anger ruins everything including the soul.
And there are only two things which could fix this.

It's a belief and the magic whistle.

This play will take you to accompany Suri, a little girl who tries hard to find the magic whistle.
To live everyone's dream.

TRANSLUCENCE

RESEARCH/WORKSHOP

リサーチ&ワークショップ

REHEARSAL

7.17-23 リハーサル@美術館第4展示室 7.24-26 リハーサル@美術館ホール



7.1-2 リサーチ@いの町



7.3 ワークショップ@いの町立神谷小中学校



7.5 地域創造ステージラボ ワークショップ@美術館ホール



Performance

7.27-28 公演@美術館ホール



Iwan Effendi / Artistic Director

Maria Tri Sulistyani / Co-Director

Ayumi Hamada / Interviewer

イワン・エフェンディ / 芸術監督

マリア・トリ・スリスチャニ / 共同芸術監督・演出

浜田あゆみ / 聞き手

浜田 / レジデンスはいかがでしたか。

マリア / メンバー全員でのレジデンスは初めてでしたので、非常におもしろかったです。以前他のレジデンスでもチームで滞在しましたが、イワンが不在でした。レジデンス期間が短かったので、当初はホールでの上演に多少のプレッシャーを感じました。というのも、劇場という場所には独特の歴史やストーリーがあるからです。数多くの素晴らしい公演がここで行われたという価値がありますよね。ですから、それなりに良い公演をしなくてはという焦りを感じました。同時に、日本のアーティストが参加したことも良かったですし、素晴らしいことでした。出会う前から信頼関係がありましたので、仕事がとてもスムーズに進みました。スケジュールはタイトでしたが、期待を越える結果となりました。あなたも同じだったんじゃない？

イワン / 2年前に高知に来た時にあれこれやった覚えがあるんですが、そういった記憶が通し稽古をするたびに蘇ってきました。それは大変素晴らしい体験でしたし、我々にとっても、自分たちが滞在した新たな場所についての本公演をするのは初めての経験でした。場所、感覚、雰囲気といった細かなことまでよく覚えています。何をして、どのように公演に組み込んだとかね。

浜田 / 感覚的にも嗅覚的にも全て揃っていたと。

イワン / そう、全て。巡り合った人々、回り道で感じた距離感などを冬の柳野のシーンに活かした。そういったことを思い出しました。

Ayumi / How was the residency?

Maria / It's been actually very interesting because this is the very first time we have the full residency of the all members. Before we ever had another residencies as a team, but Iwan was not joining. We found that performing in the hall is giving us a bit of pressure in the beginning. (because of the short period of time we had.), because it is a theater hall where has own story, own experience and the value that thousands of wonderful performances have been done. So I felt that we urged to do something good. And on the other side, having another artist come from Japan is also great. It is just amazing. I really like the way we trust each other at the beginning before we met. It brought us a lot of smooth ways to work. Even though the process was tight, the result was beyond my expectation, actually. Is it the same as you?

Iwan / I mean, in my experience, I remember many things we have had done in Kochi two years ago. That kind of memory came out every time we run the process. That was really nice and actually that was the first time for us to make a full performance about the new place we stayed. I always remember all the details of the places, feelings, atmosphere, and what we have done to make into the performance, you know.

A / You have felt, you have a smell, I guess you have everything.

マリア / 高知にはすでに馴染みがあったことが非常に良かったですね。初めてのレジデンス作品『かくれんぼ』で来た時には、高知についての知識はまるでなかったのですが、1ヶ月の滞在でさまざまな方と出会い、表面的なお話以上のものを集めました。もっと多くのことができたらと思えてなりません。

浜田 / インプットが多すぎて受け止めきれなかった。
マリア / その通りです。ですから2度目のレジデンスができて本当に良かった。もっと深めていけると。どこに行けばいいか、どんな素敵な人たちと出たいか、など、すでにわかっていたので、アートワークが深められました。大好きな場所で2度も滞在制作ができるなんて、素晴らしい経験でした。

●
浜田 / 以前のレジデンスでは4ヶ月の赤ちゃんでしたが、ルナンくんも今は2歳。幼児を抱えての仕事はいかがですか。

イワン / 極めて順調です。今回も2年前と同じやり方で変わっていません。マリアが最初に演出をして、その間は僕が息子の面倒をみながら何か細かいことをやり、息子が寝るか何かしたら、僕が稽古場に行く。家に帰って息子が寝ている間に、マリアと作品について話し合う。翌朝また息子が起きるまで作品について詰める、という具合です。

浜田 / まさにプロのファミリーですね。

マリア / まあそうですね。息子の面倒を順番に見るといっても実際はチームワークでやっていて、それもまたうまくいっています。我々のカンパニーの歴史の一部として、こんな時期があるということで、家族のように皆がお互いを気遣っています。

イワン / “期待マネジメント”を常に視野に入れています。作品を作り、アートワークを重ねていくことは期待を積み上げていくことでもあります。期待というのは結果的なものに限らず、予想外である、ということでもあるのです。例えば「このシーンで

I / Yes. That's everything. People we met. People we sensed the distance in our detour. I tried to make a winter scene of Yanagino. Those things that I really remember.

M / It was very nice because this is not our first time to be in Kochi. For example, when we first came to Kochi for residency for 'HIDE and SEEK', we knew nothing about Kochi. But within a month, meeting people, gravitating stories which is not really the surface, made us feel we wish we could do some more.

A / Too many inputs and you couldn't conceive.

M / Yeah, true. That's why I keep saying that it is really nice experience that we have the second time of residency. Then we can go deeper. That we already know that place that we will visit, which wonderful people we love to meet, we know more. So, the artwork becomes deeper. It was really nice experience that the second time residency in the place we love.

+++

A / Before you had a 4 months old baby and now he's two year old. How is it working with Lunang (your son)?

I / That's quite OK. We still use the same technique as two years ago this time. Maria directs the performance in the beginning while I am taking care of him and thinking about another detail.



この感情を表現したい」としますよね。でも子供がむずかかってしまうとそれができない。でも何とか手段を見つけてそれをやり遂げる。

マリア／流れに任せる。私がいいな、と思うのは、私たちのやり方では何かを無理に押し通したりしないんです。やりたいことがない、というわけではないですよ。やりたいことはやりたいこととしてあるのですが、そのためにプレッシャーを与えたり、傷つけたりといった方法は取りません。紙を扱う場合と同じですね。力を入れ過ぎれば破れてしまいます。ダンサーと一緒に仕事をするというのも同様です。ダンサーは、私がダンスについては素人だということを知っています。ですから私のように踊れとは指示しませんでした。もちろん彼らの方が我々よりダンスについてはよく知っているわけですし、私たちよりもダンスについての言語を理解していました。そういったことがおもしろかったです。そして稽古が始まって、和紙の特長を語るように言葉を投げて見たんです。すると彼女たちはそれらをうまくダンスで表現してくれました。信じられませんでした。

浜田／実際そうですね。ダンサーの2人はそれができてしまうんです。

マリア／aCae (アカエ) さんともまさにそうでした。幸せな瞬間の音楽をお願いします、と私が言うと、「わかりました。どんな感じの幸せですか」と返される。「では、幸せで泣いてしまうような感じで」と私が言うと、「了解。それなら任せて」と。

浜田／オペラさんもそうですね。

マリア／はい、みなさんが通常どのようにしているかはわかりませんが、実際、これが私たちの仕事のやり方です。我々とこのような状況で共に仕事をすることをどう感じどう考えるか。男性陣は笑いが絶えず、高校生が悪ふざけをしているようでした。

イワン／私がおもしろいと感じるのは、こういったコラボレーションをしていると、リハーサル室で稽古をしている時は各々が別々に過ごしていても、小屋入りして劇場で稽古をするようになると、それが混じり始めることです。

When he sleeps or anything, I can get to rehearsal, and when we go back home and he sleeps, we talk about the performance. When we wake up in the morning, we talk about the performance, and when he wakes up, we stop.

A / So you are kind of like a professional family.

M / Kind of. It is really nice also that that's why we have the team that we can actually take turns of taking care of him. Because this is the time of our company, it really looks like a family, so everyone is taking care of each other.

I / I always have the expectation management. Because building performance, building artworks are always full of expectation. And even expectation is not the result but the surprise itself. We have to manage like, "we want this feeling in this scene," but we couldn't make it because Lunang is crying, something like that. But, yeah, we just make it.

M / Let it go with the flow. I think that good point is that we are not pushing anything. We know that we love to do something good and we do persevere to do that. But it's not giving a high pressure or hurt anything or anyone. so it is just like working with the paper itself. If you push it, you will break it. And either the same way working with the dancers. The dancers know that we know nothing about the dance. We didn't ask them to dance like me.



浜田／ダンサーの2人は英語があまり話せませんでしたしね。

マリア／人形遣いたちもそうでした。

浜田／ですから「触っても大丈夫ですか？」みたいな感じでお互いに様子を見ていましたね。でも劇場で稽古をするようになってからはガラリと変わりました。パンボは人を笑わせるのが好きで、ベニはとってもデリケートな人だということがわかりました。**イワン**／そうさせるプレッシャーのようなものが劇場にはあると思うんです。劇場の空間は演者同士の理解を深め、芸術感覚を研ぎ澄まさせます。

浜田／香菜子さんが何か日本語で話している、それと全く同じことをインドネシア語で話している、という時が何度かありました。言語を介さなくても通じていることが彼らにはありました。

イワン／通し稽古の直後が一番おもしろかったですね。私が皆にダメ出しして、それをあゆみさんが日本語で伝える。それを自分と演者は毎日繰り返すうちに、日本語が徐々にわかるようになっていった。インドネシア人の僕たちは、日本語でその時何が話されているかがわかるようになったのです。

●
浜田／レジデンスから何を得たかについてはすでにお話ししましたが、さらにお話ししたいことはありますか。

イワン／私の場合について話しますと、まず和紙について話しましたよね。原料や歴史、携わる人々の話など、新聞から十分にわかりました。製紙工場を訪ね、そこで働く方々にもお会いしました。また、そのブランドがこれまでどのようにやってきたか、といったような情報は始めから提供されていました。私たちは、自分たちが訪れる国とインドネシアのどこが違っていたかを常に比較するのですが、毎回ショックを受けます。インドネシアでは伝統が失われつつあります。

マリア／ビートンパークだけですね。紙に携わってい

Of course they are better than us. They know their language better than us. So, it is very interesting. In the beginning of the rehearsal, I just threw the words like type of washi paper to them and they made them into a dance. It's crazy.

A / Actually it's true. They can do that.

M / Just like also working with aCae. I love to have a happy moment. Then he said "OK, what kind of happiness?" I said, happiness that makes people cry. He said "Oh. I am good at it."

Ayumi / Opera, too.

M / Yes! I don't know how usually you guys work, but well, it is actually really how we work. What do you feel, how do you feel to work with us with this kind of condition, while the boys kept laughing just like high school guys like stealing pants.

I / I feel the interesting part of this kind of collaboration is when we had a rehearsal in the rehearsal room, each of them were self organized. But when we moved to the hall and then, they started to blend.

A / I guess the dancers were not comfortable speaking in English.

M / Either the puppeteers.

A / So it was like to see what kind of people they are, going like, "Can I touch you?" When we moved to the hall, it was totally different. Because we learned that Pambo is a kind of funny guy and Beni is very delicate man...

I / This kind of pressure belongs to the hall such as theater space that makes people being aware of each other. They give to appeal something artistic there.

A / There were times when Kanako spoke Japanese trying to mean something while the others were speaking exactly the same thing in Indonesian. They sometimes didn't need any languages. They settled themselves.

I / Most interesting part was after the run, I gave

るのは、ごく一部の人だけで、それも非常に少ない限られた人だけです。紙に限らず、伝統芸術、例えば手織りの生地や、テラコッタなど多岐に渡って。
浜田／それを日本の和紙産業と結びつけることができ

notes and everybody would say something and you would translate in Japanese and then you translated it into English. I and the performers did this everyday and began to speak Japanese.



たと。
マリア／はい、それに加えて、ここで私たちがしていることは大変興味深いことです。高知で行なっていることを、何かインドネシアでもできるのではないかと話していたんです。私がおもしろいと感じたのは、近くにすぎると気づかない、ということです。日

Because we knew what exactly you were talking about.

+++

A / We talked about what you gained from this

本人が、現状の和紙の仕事にどう向き合い、インドネシア人の視点を通した和紙の文化を日本人がどう捉えるかがわかったのはとても良かったです。そうすることで、自分たちだけで全てを完結させるよりも、さらに身近に感じられる時があるのです。そのためには何らかの橋渡しが必要です。そして同時にまた、和紙は私たち自身を見直すための橋渡しの役目も果たしてくれました。まさに和紙を通して明らかになったので、そういった理由から、タイトルは「和紙を透かして」としました。とはいえ、どういった着想を得るかを最初の時点で予想して決断するのは本当に困難なことでした。来日して人に会ってから、これは家族についてなんだ、人々がどのように熱い情熱を抱え、幸せな人生を生きていくか、それがすなわち核なのだ、ということが見えてきました。伝統を保ち、受け継いで行く。それは技術的なことだけではなくて、情熱とともに次世代に受け渡すことなのだ、それぞれの時代に特有の情熱があるのだ、とわかったのです。

イワン／どう捉えるか、和紙はどう守られ、どう革新的でいられるか。そしてグローバル化がそれによっていったひずみを与えるか。

マリア／おもしろいことに、イワンは常にそういった視点から物事を眺めているんです。政治的な、大きな視野で。私は常に細かいところを担当します。そして時々感じるんです。「イワン、あなたは遠すぎる。私は近すぎる」ってね。

浜田／同じストーリーを、イワンさんは離れたところから検討していて、マリアさんは細かいところを見ていく、と。

イワン／そうです。実際そんな風に進めることがあります。マリアがベースを作って、僕がそれを膨らませていく。そのあと新しい視点を入れていって、マリアが再考する。演出家が2人いるようなものですね。実際、2人が同時にステージにいることはありません。お互いにとってもあまりメリットがないからです。

浜田／完璧なコンビネーションじゃないですか。

residency, but if you have more to say?

I / For me, myself, we talked about paper, I often work with the paper itself, like we know the material and the history, and the story of the people from newspaper. We had the chance to visit the mill and met the people. We knew where the brands came from and that kind of offering for me in the beginning. We always compare what happened in the country we visit, to what we have in Indonesia. And then it gives us a shock. We almost lost the tradition of the paper in Indonesia.

M / Very few people does. And it is only the Beaten Bark now. And it's really rare. It is only very few people doing it. It was not only about the paper but also our traditional arts like hand woven, terra cotta, many things.

A / So you could connect Japanese washi to your paper.

M / Yes, in addition, it's very interesting what we are doing here. I keep thinking we can do something in Indonesia talking about this. It is very interesting, I think it is because you are too close, so you didn't realize. It is good to see how Japanese people will see this work, their culture of washi paper through the eyes of Indonesian artists. And that makes them feel closer rather than all that ours, you know, so it's sometimes we need a bridge. And then, I think washi becomes also bridge for us to see ourselves to see through the papers apparently. That's why we say the title of the performance is TRANSLUCENCE. It's quite hard to decide that in the first time what kind of story we would conceive. And after we came here, and then we met those people. We said, oh, OK. So this is about the family itself. It is about how people need big passion, happiness to live their lives. Exactly that's the main thing. To keep the tradition, it runs to pass the tradition. It's not only about techniques but it is also about the passion you have to pass

● **浜田**／当初やりたかったことは全てできましたか。
マリア／はい。劇場でお客様を見たときにそう思いました。お客様の反応を見る、それが私たちの仕事が終わるときです。
イワン／ほんの少しだったとしても、お客様の笑顔が見れるとね。
マリア／今回私たちは小さな生物を作りましたよね。でも私たちはその生物を何と呼んでいいのか考えあぐねた。お会いした石黒さん、田村さん、安芸さん、浜田さん、友草さん。彼らにお会いした後に生まれたこの生物は、彼らとの会話から生まれた感情だったのです。彼らは本当に素晴らしい人たちで、レジデンスの最初の頃はまだそれがわかっていなかったのですが、最後にはストーリーの要となりました。
浜田／ダンサーたちと話したことがあったんです。これは何なのか私にはわからないけれど、何らかの生物だと。生物と訳したり、神さまと訳すこともありました。訳してはいるのだけれど、私自身もそれが何なのか、何の神さまなのかは全くわかりませんでした。とてもデリケートで繊細で、私たちが祈りを捧げたり将来を見据えたりするためのものだということはわかるのですが、何と訳していいのか釈然としなないところがありました。神さまだと決めつけてしまうことにも抵抗があったので、ダンサーには、「これが何かということを決めつける必要はないだろう」と話しました。観客が感じるままに任せればいいのではないかと。
マリア／日々展開していく様子を見守るのは楽しかったですし、細かいところから一緒に作り上げてきたんだ、毎日そうやって演技をつけていったんだ、と。もしかしたらそれは公演そのものよりも大切なことかもしれません。和紙を作る作業を通して、時に破れても、そういった活動そのものがそれぞれおもしろかったです。

through your next generation. Each generation has its own way of finding the passion.
I / How to see...how their washi is preserved. And how wash is innovated. How the globalization breaks everything.
M / It is very interesting because Iwan always see everything, anything from that point of view. Like political, big picture. And I always go to the little details. Sometimes like "Iwan, you are too far. I am too close," you know.
A / Iwan looks at the stories from far away and Maria goes into details.
I / That's how it goes, and that's how we work actually. She starts to build, and I will edit. When I edit it, I find new things. And she will edit it again. So there are sometimes two directors actually. But we never be on the same stage at the same time because it won't be good for each other.
A / You are the perfect match.
 +++
A / Did you complete what you had expected to do?
M / Yes. Actually by looking at our audience. Reaction. That's where we say it is complete.
I / Even this slight. Their smiles.
M / We made a little creature. We didn't know what it is in the beginning. But by the end, that is the energy that we are actually thinking about when we met Masatane san, Tami san, Mana san, Toshiko san and Kimi san. So this ball of light is actually the energy of them. I said that was the creature after we met those people, and that was the feeling came out from our conversation. "Oh my gosh, these people are amazing." We don't know what it is in the beginning, but by the end, it actually becomes the main role.
A / So I was talking to the dancers that I am not sure. I don't know what the creature is about.

● **浜田**／大変だったのはどんな時ですか。
マリア／待ち時間、でしょうか。高知に来るまでの待ち時間。台本が出来上がるまでの待ち時間。待つ、という工程そのものです。それが最も苦勞しました。
イワン／パフォーマンスを通して自分が何を感じるか、それを知るには経験する以外に方法はなく、そこで感じて、そこで作り上げていく以外にないんだ、ということです。公演2日目の音楽は、さらに充実して美しく、完璧でした。オペラさんのバイオリンもリバーブが効いていて深く感情豊かで。人は何かを愛すると、さらに与えたいもの、と、いうのを目の当たりにしました。
マリア／一緒に仕事をする人は、スーパースターである必要はないけれど、私たちと一緒に仕事をしたい、という人でないと困る、と。私はそれが重要なことだと思っています。このレジデンスにあたっては、最初からすでに大きな包容力を感じていました。実際、優しい心を持った人たちと一緒に仕事をするには意味があります。ただその場所に行って帰って、報酬をもらっておしまい、というような人たちと働くのとはわけが違うからです。
イワン／私は常に、アーティストというものは生きる言語を紡ぐものだと思っています。アートはモノではなく、人と人とを繋ぐ関係であると。そんな風に仕事をしています。
マリア／世界の異なる国のアーティストとのコラボレーションで経験することはちょっと違うのです。アーティストによっては、アートそのものが結果であり、そのために戦う、つまり本当に戦うのです。
イワン／ですが、後になってわかったんです。それが



Because when I translated, sometimes I had to call it creature or God. And at the same time I didn't know what he is or what god he is like. It is very delicate. It is very sensitive. It is about how we pray or we foresee about future. But I wasn't sure about the creature how to translate it. Sometimes it was hard to strangle it to a god, and then we were talking like "Maybe we don't have to figure out what it is." It is up to the audience how they feel.
M / It was nice to see the process actually really developed day by day. It has been built together from the little details we started and I had acted at them every single day. It would mean much more than the performance itself. So it is very intriguing. It happens through the process of making paper all the times, sometimes they break, but those activities are very interesting.

+++

A / What was the difficult part for you?
M / Waiting, right? Waiting until we came here. Waiting until we found a script. The process of waiting. The hardest part sometime is that we can't give what people expect in the beginning.
I / You have to be there, you have to feel something, and you will build something. On the second day of the show, the sound was beautiful. I mean it was more solid. So it made the sound perfect. Also Opera's violin was more reverb, deep and emotional. So we can see if someone loves something, they want to give more.
M / We don't need to work with a superstar, but someone who wants to work with us. I think that is important. I think the process started with big heart

その土地のアート業界のカルチャーなんだ、と。彼らは戦うしかない、けれど、私たちは違います。インドネシアでは争う必要がそもそもないのです。

マリア／争うのは好きではありませんしね。問題は何かの？みんなケーキを1切れずつもらえるじゃないの。一緒に作りましょう、って。つまり、私たちにとっては常に関係性を築くことが重要なんです。自分たちが出会った人たちからお話を伺って、考え続けるというのも、そういう理由からなんです。常に関係性が大切なのです。



イワン／友達を増やしているのもそういうことです。

マリア／このレジデンスはそれを可能にしてくれました。お祭りに連れて行き、人との出会いやその人たちの文化を感じられるようにアレンジして下さったりとかね。同じ場所に滞在していましたので、おにぎりを売っている女性と知り合いになったりもしました。小さいことですが、私にとっては重要なことなんです。産直市に毎朝行っていたのです

が、レジのおばさんが私たちが公演をすることを知って、美術館に観に来てくださったんです。自分たちでいろいろ探求しましたが、その過程では巡り会えないような方との出会いを紹介していただきました。

イワン／我々は色々な方と出会い、沢山のストーリーを育み、生みだしました。そしてそれが上演作品となります。一方で、どのように作品を組み立てるかは細心の注意が必要です。誰かや何かを中傷したく

as I could already feel it in the beginning. Actually it always means something to work with people who own sweet hearts. It is not only just OK, just do this and then go home and then get my salary and that's all. Not those kind of people who I work with.

I / I always think what artists do is about a living language. Art is not the object but relation which makes people tie. That's how I work.

M / It's a bit different experience by collaborating with artists from different part of the world. Some artists think that Art is the main result. And they will fight for that. Like... really fighting.

I / But we understood. That is the culture of their art industry there. So they have to fight. But it's not for us. In Indonesia we don't have to fight.

M / We don't like to fight. What is the issue? Everyone can get a piece of cake. Let's cook together. So for us, it is always thinking about building a relationship. And that's why we also keep thinking about having the stories from the people we meet. So it's always about relationships.

I / That's why we keep making friends.

M / This residency allows us to do that. You guided us to meet people and took us to visit places and feel their culture, see the festivals, like those little things. Staying in one place made us acquainted with a lady who sells Onigiri on the corner of the street, those kind of relationships. Small ones, but important. We went to a local market every morning and actually the cashiers knew that we were to perform at the museum. Then they came to see the performance. So you really let us explore and introduce people that might not be able to meet ourselves.

I / We met so many people and we built so many stories out of them. And it will be present for them. On the other hand, we have to be careful of building the performance. We don't want to discredit someone or something. We all have

はないからです。我々誰も生活の中で問題はあるわけです。それはどこかで繋がっているものなので、お話を作る場合には、そういった問題には細心の注意を払わなくてはなりません。マリアは常に事実を描く人です。それが彼女の特質でもあります。ですからストーリーは一捻りしなくてはなりません。事実即していても構いませんが、全ての物事には原因があり、それは非常に深いところに理由がある場合が多く、一筋縄ではいきません。ダンサーとも一緒に作品を作っていますし、ダンスは常に抽象的です。**マリア**／隠喩ですね。

イワン／自分たちはいつもモノを扱っているのですが、ダンサーの動きや身体性には驚きました。また、これは言っておきたいのですが、あゆみさんがいてくれて本当に助かりました。

マリア／今回は誰かがリーダーになってくれないか、と思ったんです。そこにあゆみさんがいてくれた。

イワン／副ディレクター。共同演出家ですね。どうということかという、時に感情について話したい時がありますよね。感情は抽象的なことなのですが、ダンサーの人たちと抽象的なことを話したいわけです。ダンサーは体内のロジックに沿ったボディラングージで会話ができますが、私たちにはそれはできない。もしもインドネシア語が通じるなら直接会話ができてうまくいったでしょうが、今回は通訳が必要だった。

マリア／そしてもちろん、あゆみさんは和紙について深い知識があった。

イワン／我々がどういったことを知りたいのかも理解があった。ファーストシーンができあがった時、ダンサーはすぐに表現できた。そうだ、柳野の冬を感じる、と私自身、あの空間で体験したのです。それは本当にうまくいきました。あゆみさんがダンサーを指導してくれたおかげです。

マリア／地元のアーティストとして稽古に顔を出すだけでなく、実際に私たちの仲間になってくれました。

イワン／人としてのコミュニケーションが成り立っていたから、信用できた。

problems in our lives. It's like a circle, and you just have to be really careful to build a story free from the constraint. She always writes something realistic. That's her nature. That's why we have to have a reason. And the reason has to be quite deep or strong or wide to make you dig more things. And of course we work with the dancers. Dance is always abstract.

M / Metaphor.

I / The way they moved their bodies amazed me because we always work with the object. And Ayumi in the scenic really helped. Just to let you know that.

M / We had to think about picking someone who would be the leader of them. It's Ayumi!

I / Sub-director. Co-director. Because sometimes we just wanted to communicate with the feelings. It's rather abstract. Talking to the dancers sometimes we need to talk something abstract. Also, dancers have inner logic of their body language and we don't have that. If it's in Indonesia, we can talk directly and it would be fine. But we have to translate here.

M / And you know more about washi of course.

I / And you know more about what kind of study we want to do. When the first scene of winter came out, dancers could perform immediately. That's Yanagino...I could feel Yanagino during the winter. I myself experienced at the space. And then it really worked out. Ayumi directed the other dancers.

M / It's good to have a local artist not just only coming to the rehearsal time but also joining us.

I / I trusted that we build which is just human communication.

+++

Q / Did you gain what you had expected?

A / Yes, actually, as I continue to do my own washi

●

職員／あゆみさんは期待通りの収穫がありましたか。
浜田／はい。自身の和紙のプロジェクトをこれまで継続してきて、これ以上やることがあるのかと思っていたのです。10年間の和紙のプロジェクトをやっている、今はその3年目なのですが、あと7年やることがあるのかと。でもお客様の1人の言葉で考えが変わったんです。「和紙にこんなにも将来性と可能性があるなんて」とおっしゃったんです。実際自分がやってみて3年もかかりました。ですからそれを聞いた時に、よし、私はあと7年やっていけると感じました。私がこのレジデンスで期待していたことの1つが、みなさんが和紙の世界観をどのように捉えているかということでした。私とはどのように異なった視点で見ているのか。それは根本的に異なっていましたので、私の世界観が広がりました。
マリア／そう言ってくれてありがとう。楽しんでもらえたのなら良かったです。
浜田／そうですね。とても居心地のいいレジデンスでした。
マリア／私たちがこちらに滞在している間に、ジョグジャカルタでスタッフには着々と準備をもらっていました。実際、ジョグジャカルタではこのレジデンスの3ヶ月前からスタートしていたんです。ですから、こちらに来て10日間であっという間にいろいろなことができ、ゼロから始めたわけはありませんでした。
イワン／それと、彼らにはツアーに慣れてもらう必要がありました。アメリカやイギリスのツアーの際に、システムも文化も全く異なる海外の国々でどうやって馴染んでいくか、よく話して聞かせたものでした。ですから、今回はあまり心配はしていませんでした。稽古が終わったら家に帰って休み、飲みには行かない、なぜなら翌日もやらなければならないことがあるから。皆やるべきことがあるのだよ、と、まるで親子のように話して聞かせていました。今回は本当によくやってくれました。
マリア／翌日仕事にならないほど飲んでも、日本人はちゃんと仕事に来ますよね。
イワン／インドネシア人には無理。文化的な違いですね。インドネシア人は経験したことがあると思う

project, I feel whether if I can do more to express. Because right now I am thinking about continuing washi project for 10 years, and now it is the 3 years. Do I have 7 more years to do? But, one of the audience came to see the performance and said "I could see so much possibilities and potentials of washi." It took me for 3 years through me, through my body. So, when she said it, I was like OK, now I feel I can continue the project for next 7 years. So one of my expectations in this residency was to gain the opportunity to see how you guys see the world of washi. How you guys think different from my point of view. I think it is totally different. I think that makes my world richer.
M / Arigato. Hope you enjoyed the process.
A / Yes, I am really comfortable.
M / While we were here, the other members kept building the stuff in Jogjakarta. Actually we started to prepare 3 months ago in Jogjakarta. So once we got here, we just did "Phew" in 10days. It's not really from zero.
I / Also they have got used to touring. We talked a lot with them in the US and UK, how they should self organize in foreign countries because they have quite different cultures and the systems. So we didn't worry a lot about them. And after the rehearsal, they have to get back home and sleep, not to get drunk because we still have something to do next day. They do their own stuff. We used to tell them like their parents. But this time they really well organized.
M / If you drink, then next morning, you can't work. But Japanese still come to work next day.
I / Not for Indonesian. That's the culture difference. That's how we experienced in Indonesia. When we do the project and drink, everything will be erased.
A / Ha ha. Really.
I / Because we don't only work with our bodies. We work with objects. If there is anything wrong, we have to fix it exactly. That's how we built our culture in our company.
A / That's all. Or let's continue talking at the farewell



んです。プロジェクトをやって、飲んで、全て記憶から消えてしまう。
浜田／ははは。そうなんですね。
イワン／自分たちだけで仕事が完結するわけじゃないからね。扱うのはモノだから。何かをやらかしてしまったら、同じ状態に戻す。それがうちのカンパニーの考え方なんです。
浜田／質問は以上です。あとは打ち上げの時にでも続きを話しましょう。
全員／ありがとうございました。

party.
All / Arigato.

関係者の声

Voices of the local artists and staff

浜田あゆみ / パフォーマー Ayumi Hamada / Performer

高知にいと、思ってもみないことが起こる。今回のペーパームーン・パペット・シアターとのコラボレーションも、和紙をテーマにした作品作りも、まるで思ってもみなかったことだ。2015年に和紙を用いた滞在制作のプロジェクトを始めた時、ちょうど滞在していたマリアとイワンと小さなルナン。そんな彼らとまた出会えることだけでも幸せなことなのに、一緒に作品を作るなんて。制作は、春にメールで始まった。私や、私の母へのインタビュー、それがどのように作品につながっていくのかはまるで想像できなかったが、さすが世界中で滞在制作をしている彼ら。高知に足を踏み入れるや否や、あっという間に作品を作ってしまった。和紙の世界は奥深い。が、少ないリサーチの中で、瞬時に様々なことを吸収し、和紙に携わる人々の想いや和紙を愛する人々の想いを汲み取ってくれたマリアとイワン。リハーサル期間はほぼ3日×3時間。気づいたら舞台の上に立っていた。そして、観客の皆さんの美しい涙をたくさん見ることができた。

この作品が世界に羽ばたいて、またたくさんの人々の目に触れる日が来ますように・・・高知にいと思ってもみないことが起こる。そんな夢も、もしかしたら夢ではないかもしれない。

When you are in Kochi, things that you never expect to happen can happen. I never thought I would participate in a collaborative work with Papermoon Puppet Theatre. I also never imagined that I would do a production based on the theme of Washi. In 2015, when I started a residency program around the theme of Washi, I met Maria, Iwan and a small Lunang for the first time. It is overwhelming to meet them again, and I never imagined I would be able to join the creation of "TRANSLUCENCE." The process began in spring with e-mail correspondences to me and my mother. I had no idea how those conversations would lead to the final production, but due to the great experiences of residencies worldwide, they have created a beautiful story at an astonishing speed. The world of Washi is very deep



indeed. Maria and Iwan absorbed many things in a short period of time, with limited research. They even showed an appreciation and sensitivity toward how people who love Washi have become attached to it. We rehearsed for three days, for about three hours each day, and I somehow found myself on the stage. I sensed beautiful tears among the many audience.

I hope that this production will find its way to the world at large, and attract many people some day. When you are in Kochi, things you never expected to happen can happen. Maybe such a dream would become a reality.

片岡美由紀 / パフォーマー Miyuki Kataoka / Performer

数ヶ月前にこの作品へのお誘いをいただき、好奇心と共に先ずパペット？人形劇とは何ぞや？から始まりました。youtube や HP でカンパニーのことやインドネシアについて調べまわった事を思い出します。そしてダンサーとしての様に作品に関わっていくのが楽しみ半分不安半分でドキドキしていました。

いよいよ初日はワークショップからのスタート。今までの少しの不安を一変に塗り替えられるかの様に、共に制作させて頂く時間が愛おしくてしょうがなかったです。そこには言葉も、文化も国をも超えて、人間誰もが持っている共通の感情や動き、魂が存在していました。そしてストーリー、紙や人形、メンバーといろんな角度から関わる日を追うごとに、だんだん、ただダンサーとしてということではなく、一人の人間として舞台に存在することを求められていることに気づきました。簡単なようで私には大変難しい壁に一度向かい合いました。でもマリアを筆頭にカンパニーの皆さんが常にポジティブなエネルギーでお手本を見せてくれたので、とても勇気が湧き、結果、この作品に対して今在る、できる全てを注ぎ本番を迎えることができました。

今回はこの様な素晴らしい公演に一メンバーとして参加させていただきましたこと、



素晴らしい出会いをいただきましたこと、お世話になった全ての方々に心よりお礼申し上げます。

I was asked to join this project several months ago, and I began with a sense of curiosity as well as questions about what the puppets and the puppet theater were. I remember looking at YouTube and searching about the company and Indonesia on the internet. My heart kept beating rapidly, half from anxiety and the other half from the anticipation of how I was going to deal with the production as a dancer.

We started with a workshop on the very first day. It was quite an experience to dissolve my anxiety, and I totally enjoyed and loved the time we worked together. There was a sense of soul, emotion, and movement that all humans are familiar with, regardless of any differences in languages, cultures or countries. What I realized as rehearsals went on, immersed in the environment of paper and puppets with everyone, was that I was being asked to be present on the stage not only as a dancer but also as a human being. That may sound easy, but it was the primary obstacle that I had to overcome. Maria and the people in the company always showed me ways to move with positive energy. I felt encouraged and inspired, and finally had a performance in which I satisfyingly spent all of the power I had.

Thank you very much for letting me be a member of this incredible production. Thank you also for giving me wonderful meetings. I would like to convey all of my appreciation to all the people who have been a part of this project.

山本香菜子 / パフォーマー Kanako Yamamoto / Performer

踊りを始めて35年、いろんな人と舞台にたってきたけど、こんなに優しく、暖かく、そして笑いの絶えない人達

に会ったのは初めてではないだろうか。本番当日なのに、コントのような場当たり。これには、本気で動揺した。出演直前で緊張しているのに後ろで私達の真似を、パロディで見せてくる。本番中に笑ってしまいそうだからやめて！と、大笑い。言い合いになりそうな事も冗談に変えてしまう凄さ。ここまでくると、ゆるいカンパニーのように思えるが、舞台に立つ彼らはプロそのもの。

パペットの表情の変化と一緒に舞台にいる私達が引き込まれてしまう。おじいさんの表情には、涙をこらえるのが必死だった。あまりにも自然体なパフォーマンスにどう答えたらいいのか悩み、踊ろうにも身体が固まりそうになる。けれど、すべてを受け入れてくれる笑顔に自然と溶けていった。

自分は一員になれたのだろうか。全てが終わった今でもわからない。けど、この出会いに、只々感謝の言葉しか出てこない。ありがとうございました！！



It's been 35 years since I started to dance. I have been on the stage with many people over the years, but this would probably be my first time meeting people who are this kind, warm, and funny all the time. For example, I was totally lost the day of our production because we had a dress rehearsal just like a comedy show. I was so nervous right before the performance, but they appeared behind me and copied me and the other dancers' movements. I laughed hard and told them to stop because I might risk bursting out laughing during the performance, remembering their imitations. There was also a time when we almost fought with each other, but they wisely turned it into a joke. They are great. They are certainly professional on stage and they seem like an easy company off the stage.

Being together on stage, the other dancers and I were drawn to the puppets and their expressions. It was very hard for me not to cry looking at the old man puppet. They looked excessively natural, but how should I respond? My body was almost frozen thinking about it too much, but they accepted and welcomed me in every way with a smile, and my worries naturally disappeared. Did I become a member of the team? Things are all over

now and I still don't know the answer yet. But I can tell you how much I thank them for this meeting. Thank you very much!!

オペラ / バイオリン

Opera / Violinist



今回ペーパームーン・パペット・シアターに参加して、みんなで一つの世界を作ることに触れることができた気がします。私は団体行動が苦手、最初はとても不安な面もありましたが、そんな不安を感じる必要が無かったのだと思うことができました。それはインドネシアの人たち、高知の参加される人たちの「モノ」を作ることに對する姿勢が、私に余計な事を考えている暇がないぐらい気持ちを集中させてくれたからだと思っています。

そして、このレジデンス事業に参加するきっかけが、ぱっと見は遠く感じる繋がりからの始まりだったので、自分が今まで残してきた「点」と、自分以外の人たちが作ってきた「点」が線になって交わる感覚や、これをきっかけにまた新しく繋がっていくのだらうと、ワクワクが止まらないです。

最後に、今回関わってくれた皆様に会えたのがとても嬉しく、感謝しています。ありがとうございます。

Participating in the project with Papermoon Puppet Theatre gave me an opportunity to create one world with everyone. I was very anxious in the beginning as I am not very good at group activities. However I began to realize that it was not necessary for me to worry about that so much. Indonesian people and all the related people in Kochi were so sincere about creating "things" that they didn't give me any time to get disturbed, and I was able to be totally concentrated on my own. I can't stop being excited thinking about where this residency program will lead me, because my participation in it started from a small connection which did not seem

like it would grow much in the beginning. The "dots" I have established in my life thus far have become connected to the "dots" of other people and turned into lines of intersection.

Finally, I am very happy to meet everyone who is related to this project. I appreciate it very much. Thank you.

aCae(アカエ) / 作曲

aCae / Composer

この土地に暮らしていて、見過ごしてしまう物事がある。緩やかに連なる稜線、穏やかに揺れる草花、海や山の幸。そのどれもが貴重なものであるにもかかわらず、この場所に住み慣れたが故に、その恵みを忘れてしまう。そしてそれは土地だけの話ではない。人と人の絆、幼い頃の夢、健康への有り難み、自分というものの偉大さ。身近にあって、美しく、目に見え辛いものこそ、いとも簡単に僕たちは見過ごしていってしまう。

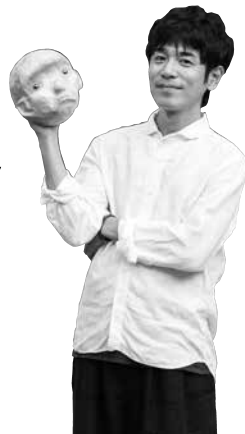
今回の「和紙を透かして」でペーパームーン・パペット・シアターが伝えようとしたものは、新しい何かではなく、見過ごした何かだったと思う。和紙、口笛、といった僕らにとって身近なものをテーマにしたストーリーだけでなく、二人三脚でひとつの人形を操るチームワーク、本番前に全員で手を繋いで行った瞑想、それらは改めて僕らに「自分は一人ではないこと、誰かや何かと共存していること」を思い出させてくれた。

パンフレットのマリアからのメッセージにこう記されている。

「今回の高知への長い旅は、和紙を通して、自分たちを再び見つめ直す機会を与えてくれました」

それは全く僕らが言いたい事。彼らとの出逢いに感謝します。

There are things that I tend to overlook since I have lived around here for a while, such as the gentle ridge lines of the mountains, wild flowers ruffled by



light wind, great seafood, and delicious vegetables and fruits. I forget how precious they are because I've been here so long. In fact, they are so valuable. And it is not only contained in the sense of place itself, but also in things such as the relationship between people, a dream when you are young, good health, or the greatness of being you. All of these things are so present and beautiful, yet easy to overlook because they can't be seen.

The ideas that Papermoon Puppet Theatre were trying to highlight through "TRANSLUCENCE" were not new, but rather comprised of things that are often overlooked, such as Washi or whistle, through which we can feel closer. They made up a story using those concepts for the theme. Moreover, they reminded us that "we are not alone and we live together with someone and something." We were reminded of this when we saw two people manipulate one puppet through teamwork, and when we all held hands and meditated before our performance.

Maria wrote in the performance flyer, "Kochi this time brought us a longer journey to see things through the papers and to find ourselves." That is exactly what we want to say. I really appreciated meeting them.

深田名江 / 記録撮影 / 地域連携企画写真展企画者

Nae Fukata / Regionally related exhibition planner

「精霊のささやき」

「和紙を透かして」は思想的な作品である。和紙が生まれる場所に住む精霊のようなダンサーの動き。職人の自負、誇り、威厳からの崇高で清らかな気持ち。それらを同時に導き出す、光とともに。お爺さんとお婆さんのリアルな動きと存在は、日本の風俗の体型を対比して表している。純粹な心の持ち主 - スリちゃんと、くちぶえ吹き - タニさん。

セリフの無い物語からは、人間が本来必要とするお互いの関係性や、仕事や場所に思いを込めることで自然に生まれてくる尊い気持ちがいかに感じ取れる。

「くちぶえ」その象徴は、魂の言葉につながる。その言葉とは。

「人形を生かすために自分を殺す」。制作撮影中、最も私

の胸に残る人形遣いの言葉である。パペット - パペッティア - ところ。大切なトライアングルの均衡。感覚を吹き込むため、むしろ無になる。またそれは、和紙職人のところとも共通といえる。

「和紙を透かして」に見た二重の透過性。ひとつは、和紙と光の視覚的關係と可能性。さらに、現代社会を透過して、失われつつある人間本来がもつ自然崇拜の精神性。自然から汲み取る精神の美しさ - その秩序。

くちぶえ、は、魂の言葉を聞くところを持ち続けることのできる人間への掛け渡し。光を透かして向こうに見えるのは、自身のなかに存在し続ける尊い普遍性なのである。

"A whisper of a fairy."

"TRANSLUCENCE" is an ideological production. Dancers moved as if they were fairies living in the place where Washi was born. Self-pride of the artisan, pride and a pure sublime feeling emerging from dignity. They lead all of them at the same time with rays of light. Realistic movement and the existence of the old man and the woman reveals the Japanese public moral system in comparison. Suri who has a pure heart, and whistler Tani.

What I clearly took away from the story was the precious feeling of being born naturally, by infusing emotion into one's job, into a sense of place, or into the human relationships that we all crave.

A "whistle" symbolizes and connects us to soulful words.

What are those words, anyway?

"You must kill yourself to make your puppet alive." This was the phrase I heard from the puppeteer during the photo shoot, and it stayed in my heart the most. Puppet, Puppeteer and mind, a balanced triangle that is so vital. You place your own self into the background in order to inject feelings into the puppet. You might also say that this is the credo of a Washi craftsman.

I saw a double permeability in "TRANSLUCENCE." First, there is the visual relationship and possibility of Washi and light. Second are the qualities of inwardness and permeability that all humans should naturally possess, but because of the development of our modern society, we might just lose. Beauty of mind is most aptly learned from nature and its sense of order.

"Whistle" is a bridge to people who have hearts to keep listening to the precious words of the soul.

観客の声

Voices of the audience

作品を観て感じたのは、人間は自然と共に生きる、いや、生かされている生き物であるということ。それを「人間（自分）が世の中の中心人物である」かのような誤解をしてしまうと、とんでもないことになってしまうということです。インドネシアはイスラム教国と聞いていたのですが、調べてみますと多民族国家で、その根底にはすべての人々の生活の中に神がいるという自然崇拝（アニミズム）だということでした。日本も「火の神」「水の神」「木の神」「土の神」…というように、あらゆるものに神が宿っているという考えがあります。アジア民族には、底流に同じアニミズムの思想があるのではないのでしょうか。

舞台を見て、高知に滞在して作品を作るというレジデンス事業だからこそと思えることがありました。新しい人、物との出会いは、素晴らしい創作物に結び付くものだという事です。また、人形の顔を作るにあたって、質感や陰影を出すためにあえて和紙を使ったと聞きました。これもレジデンスならではの、と思ったことでした。

オープニング。舞台中央には紙で作った大きなオブジェがありました。こんもりと盛り上がった形は、山と思えなくはありません。この中から現れたのは、火の玉のような正体不明の浮遊物。精霊でしょうか。その時、一瞬ですが山の姿が、人の顔のように見えました。まるで生命体であるかのように…。和紙といっても山に生えている木（樅）から作られているものです。そこに宿るものを、「魂」として表現されたのだと感じました。

今回の舞台には、3人の地元ダンサーが出演していました。和紙や人形を手にしてのパフォーマンスもあり、慣れない動きがあったかもしれませんが、最後の「和紙」が生命を取り戻してうれしそうに、元気にはためいているシーンなどは木の精霊が宿っている雰囲気がよく伝わってきて、とてもよかったと思いました。

作品は、「日本の作品」と限定するものではないし、同様に「インドネシアの作品」というものでもないような気がしました。自然の中にはどこにも精霊が棲んでいるのです。それはアジア民族に共通するものだと思います。自然の中の精霊を大事にするという共通の文化がアジアに存在する。このことをあらためて再認識させてくれた作品ではないのでしょうか。

池添 正 (高知新聞社)

What I was reminded of through the performance is that humans and nature live together, or rather someone makes these two entities coexist in a balance. If people misunderstand and think that "humans are (I am) at the center of the world," we will eventually have to face severe consequences. I understand that many people are Muslim in Indonesia, but I found out that most of them used to belong to a multiracial nation and that they had originally believed in animism, in which they worship gods in the natural world. In the case of Japan, there is a tradition of worshipping gods in nature, such as "god of fire," "god of water," "god of trees," "god of soil" and so on. Human races in Asia might share the seeds of animism somehow, somewhere.

There are certain things only Kochi-based residencies can inspire. Meeting new people and being exposed to new surroundings can lead to the great creations. I also heard that they used Washi for the puppets' face, employing the texture and uneven surface for shadow. I also thought that this could have only happened because of the residency program.

In the beginning of the performance, there was a big set in the center of the stage that was made of paper. The shape reminded me of a mountain. Then an unknown flying object, somewhat like a fire ball, came out. Was that a fairy? For a brief moment, I saw a human face on the surface of the mountain as if it was alive... Washi is made from paper mulberry trees that grow in the mountainside. I thought that they expressed "the soul" embedded in the paper.

There were three local dancers involved in this production. In some scenes they had to manipulate Washi and puppets, and I can imagine that they might have had a hard time getting used to those. But I really enjoyed most of them, especially the last scene when "Washi" revived, with his life finally returned. It looked very happy and vibrant, as if I could see and feel the fairy of the tree stayed in.

I think this production cannot be called either "Japanese" or "Indonesian." There are fairies in our nature anywhere. I personally think that that is a common notion among Asian nations. I also think that it is a commonly accepted cultural idea in Asia to appreciate the fairies that live in nature. This production gave me a chance to realize this once again.

Tadashi Ikezoe (The Kochi Shimbun)

アンケート

Questionnaire (from the audience)



人形がまるで生きているかのように驚きました。表情は全く変化していないはずの人形が首の傾げ具合や動き方で様々な表情を見せてくれました。

I was surprised to see puppets that looked alive. Their faces don't change at all but the degree of the neck and bodily movement showed a lot of emotions.

人形の瞳を見ていると自分の感情が投影されていくようでした。自然と涙が出て、様々な感情が洗い流されたような感覚になれる舞台でした。

As I looked at the puppets' eyes, I felt like my feelings were projected. I was crying without notice. That was the moment I felt many kinds of feelings being drawn out of me.



高知の伝統を大切に考えて作品を創ってくださりありがとうございます。

Thank you very much for creating a piece that values our Kochi traditions.



和紙の躍動と人形のコミカルな動きが奇妙ともいえる一体感の中で幻想的な舞台を生み出していました。台詞がないにもかかわらず観客に色々感じさせるのは、演劇に関わる者として新たな学びでした。

A vibrant movement of Washi and comical movement of the puppets produced an illusionary stage in a sense of unity. There were no lines during the performance but the presentation was still enough to allow the audience to feel a lot. As a person affiliated with the theater, I still learned new things.



人形に演じさせているのが、人形が演じさせているのが美しく曖昧で素敵でした。

I wonder if people manipulate the puppets or is it the puppeteers? That was beautifully ambiguous and I enjoyed the incredible performance.

和紙が柔らかくまた違う感触に出会えました。

Washi seemed soft and I encountered different textures.



滞在日程

Itinerary

6.30	イワン、マリア、ルナンの3名高知入り	30 th June	Arrival in Kochi (Iwan, Maria, Lunang)
7.1-2	リサーチ@いの町(鹿敷製紙、人形作家、版画作家、紙の博物館など訪問)	1-2 July	Research@Ino town (kashiki Paper Company, Paper doll maker, Print maker, Ino Paper Museum)
7.3	ワークショップ@いの町立神谷小中学校(対象：小学生1-4年生18名) ※高知新聞取材	3 rd July	Workshop @ Ino Kohnotani Elementary and Junior High School (grade 1 - 4 : 18 participants) Interview by The Kochi Shimbun
7.5	地域創造ステージラボ ワークショップ@美術館ホール(対象：全国の公立劇場制作者41名)	5 th July	Workshop for Stage Lab organized by Japan Foundation for Regional Art-Activities @ Museum Hall (Producers of public theatres : 41 participants)
7.7	セタライブ&地域交流会@ Equivalent ～材料あつめ、街中リサーチ、制作開始～	7 th July	Tanabata Event @ Equivalent ～Collecting materials, Research, Creation～
7.14	高知新聞取材 地元出演者との初顔合わせ @美術館第4展示室	14 th July	Interview by The Kochi Shimbun First meeting with the local performers @Exhibition room 4, Museum
7.15	リサーチ@絵金祭り(赤岡町)	15 th July	Research @ Ekin Festival (Akaoka town)
7.16	アントン、パンボ、ベニ、レトノ、ガディンの5名高知入り	16 th July	Arrival in Kochi (Anton, Pambo, Beni, Retno, Gading)
7.17	リサーチ@くらうど(いの町)	17 th July	Research @ QRAUD (Ino town)
7.17-23	リハーサル@美術館第4展示室	17 th - 23 rd July	Rehearsal @ Exhibition room 4, Museum
7.19	リサーチ@かかしの里(徳島県・三好市)	19 th July	Research @ Scarecrows village (Miyoshi city, Tokushima)
7.23	地域交流会@ Equivalent	23 rd July	Lunch meeting with the local people @ Equivalent
7.24-26	リハーサル@美術館ホール	24 th - 26 th July	Rehearsal @ Museum Hall
7.27-28	公演@美術館ホール(全3回公演)	27 th - 28 th July	Shows @ Museum Hall (3 shows in total)
7.29	記録報告冊子用の取材	29 th July	Interview for Museum's archive book
7.30	全メンバー高知発	30 th July	Departure

地域連携企画

Regionally related exhibition

@ Equivalent

2015年度レジデンス&公演「かくれんぼ -HIDE and SEEK-」

記録写真展 6月24日～7月31日

来場者 276名



メディア紹介

Media

7月3日高知新聞朝刊(記者 竹村朋子)
3rd July The Kochi Shimbun (Writer : Tomoko Takemura)

7月24日高知新聞朝刊(記者 竹村朋子)
24th July The Kochi Shimbun (Writer : Tomoko Takemura)

来館者数

Numbers of the audience

公演1	106名	Show1	106
公演2	120名	Show2	120
公演3	109名	Show3	109
計	335名	Total	335

コーディネーターからのメッセージ

Message from Coordinator

2015年度に一度アーティスト・イン・レジデンスを行ったペーパームーン・パペット・シアターのメンバーを再招聘し地元のアーティストと共同制作し作品を上演してもらうに至ったのは、2年前のリサーチ中に「舞台美術や衣装など全てが和紙の作品を創ってみたい」という演出家マリア・トリ・スリスチャニの言葉が忘れられなかったからです。アーティストとして国内外で活躍しているだけでなく、自国で現代人形劇のフェスティバルをプロデュースし、他国のアーティストを受け入れるレジデンスを行うなどプロデューサーとしての資質も備えた同カンパニーが、高知の特産物・土佐和紙の魅力をどのように作品に落とし込み発信してくれるのか大変興味深く大きな期待がありました。

楮農家、紙漉職人、紙人形職人、版画家など、アーティストがリサーチ中に取材したのは和紙に魅せられた方々。皆ご高齢で、若者は都市へ出て行ってしまい後継ぎがないなどの課題はあるものの、笑顔で情熱を持って取り組んでいる姿が印象的であり、そこから学んだことを脚本に落とし込んだといえます。和紙の繊細な風合いを生かして作られた舞台美術や人形、和紙とのダンス、また劇中曲やバイオリンの生演奏により、子どもにも大人にもダイレクトに伝わる作品に仕上がりました。作品から感じられる温かさは、アーティストが取材した方々や登場人物へ払った敬意の表れだと思います。また、常にポジティブで否定せずに受け入れる、いい所や美しいものを見ようとする、いつも純粋な笑顔でいるカンパニーメンバーの人柄がそのまま表れているようでもあり、さらに、短いリハーサルで見えないものに対する不安を抱えながらも、楽しみながらインドネシアチームと作品創りに励んでくれた地元アーティストの柔軟さと勇敢な姿勢も見受けられました。

当館がアーティスト・イン・レジデンス事業を始めて7年目にして見えたものは、お客様が満足してくださる完成度の高い作品創りを目指すとともに、また一緒に仕事をしたいと思わせてくれるアーティストとアーティスト同士、また、アーティストと制作者の関係が上手く築けるかどうか重要だということでした。人と人との出会いと繋がりによって本事業は支えられ、そして今後も発展していくのだと感じさせられました。

この場をお借りして、本事業にご協力いただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。

高知県立美術館・ホールプロデューサー 山浦日紗子

Since 2015, this marks our second time hosting the members of Papermoon Puppet Theatre for the artist residency program. This experience has included a co-production with local artists in Kochi, to create a piece for performance. I was inspired to invite Papermoon again because I couldn't forget what company director Maria Tri Sulistyani said during the last residency two years ago; "I would like to create a piece using Washi for all of the stage, including sets and the costumes." They are not only a notable touring company, both internationally and within Indonesia, but they also organize a contemporary puppet theater festival in Indonesia. In addition, they are also qualified producers, able to invite artists outside Indonesia for residency programs. I was therefore very interested in how they might develop their creative flair for Tosa Washi, one of the local special products in Kochi, and I had high expectations for them.

During their stay, the artists interviewed some professional Washi lovers, such as people on a paper mulberry farm and in a paper mill company, a paper doll artist, a woodblock artist, etc.. These people are now rather elderly and have no heirs or apprentices because the younger generations have moved out of the region. In spite of these problems, it was inspirational for the artists to observe their attitude towards the work. The artists also thought that their smiles and passionate attitudes were amazing and they translated what they learned from them into the production. The production turned out to be an attractive piece for both adults and children due to the stage sets and puppets, made by the sensitive character of Washi, dances with Washi paper, and music and live violin. The warmth you can feel from the piece is exactly the admiration the artists had for the interviewees and characters of the story. It could also reflect the character of the company members. They were always positive, never negative to accept things, and tried to see the admirable features or beautiful side of things and keep smiling. At the same time, the local artists were flexible and brave enough to cooperate with the Indonesian team and have fun creating the piece, in spite of feeling anxious about not having enough rehearsal time.

Over the last 7 years, as I have been involved in this residency program as a member of The Museum of Art, Kochi, I think that it is important to aim for a highly qualified production that would satisfy the audience. And at the same time, it is all about how well can you build relationships among artists or the artists and producers. I feel that the residency program has been successful as a result of meaningful meetings of people and their positive relationships, and this is how this program is going to develop.

I would like to convey my whole-hearted appreciation to all the people who have been involved in this program.

The Museum of Art, Kochi, Hall Producer Hisako Yamaura

高知パフォーマンス・アーツ・フェスティバル 2017
アーティスト・イン・レジデンス 2017 & 公演
ペーパームーン・パペット・シアター
「和紙を透かして」 / インドネシア

主催 高知県立美術館
支援 平成 29 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業
助成 一般財団法人地域創造 国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成
平成 29 年度一般財団法人高知県教職員互助会助成事業

協力 鹿敷製紙株式会社 Equivalent

撮影 深田名江
通訳アテンド 浜田あゆみ
翻訳 門田美和、アビゲイル・セバリー

編集・発行 高知県立美術館 〒781-8123 高知市高須 353-2 TEL:088-866-8000
発行日 平成 29 年 9 月 30 日
印刷 弘文印刷
デザイン ディー・ディー・オフィス

Kochi Performing Arts Festival 2017
Artist in Residence 2017 & Performance
Papermoon Puppet Theatre "TRANSLUCENCE"

Organized by The Museum of Art, Kochi
Supported by The Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2017
Japan Foundation for Regional Art - Activities Japan Foundation Asia Center
Kochi school staff friendly society General foundation in the fiscal 2017

Cooperated by Kashiki Paper Company, Equivalent

Photos Nae Fukata
Interpreter / Attendant Ayumi Hamada
Translation Miwa Monden, Abigail Sebalý

Edited & Published by The Museum of Art, Kochi
353-2, Takasu, Kochi-city, Pref. Kochi, 781-8123 JAPAN TEL : +81-88-866-8000
Date of issue 30th September, 2017
Print Kobun Printing Office
Design d.d.office